2026年11月15日（日）第579回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

地域再生の現場実践と未来への波紋



渡辺豊博氏は、台湾・埔里での大学講義と住民参加型の農村再生構想を紹介し、執筆・実践知を活用した相談システム「AIジャンボ」と、自身の行動力の原点となった幼少期の経験について語った。

さらに、能登半島への継続的な物資支援として、米とみかんを運ぶ計画や現地との交流にも触れた。

台湾・埔里で進める住民参加型の地域再生

渡辺氏は11月15日時点で台湾に滞在し、湧水の豊富な盆地である埔里を訪れている。

地形や水環境が三島に似ていると紹介し、約 8,000 人が在籍する暨南国際大学で、大学院生や学部生を対象に 3 日間の講義を行う予定だと説明した。講義は午前 3 時間、午後 3 時間で、三島の事例やまちづくりの要点を伝える。

その後に関わる農地は、かつてカルデラ湖だった場所を、隧道や水路を設けて排水し、水田にした地域である。

面積は約 190 ヘクタールで、もともとは湖だった地盤はスポンジのように柔らかく、歩くと揺れるという。

地域では、排水路や道路が狭く、雨が降ると水がたまり、米の収量が十分に上がらないことや、土の力が落ちてきたことが課題になっている。

渡辺氏は、村長や住民と話し合い、排水路の改修、道路の拡幅、水田の改良を中心とするほ場整備事業の実施に加え、公園やカフェを備えた「村の駅」を含む総合的な村づくりを提案した。

住民への説明を重ねたところ、取り組みに賛同する声が上がったという。現地では、リーダーとともに長期間の現場調査を行い、地域の良い点と課題を洗い出したうえで、解決策を検討するワークショップと総合計画づくりを進める構想である。

実践活動としては、住民約 100 人とスコップを持ち、ゴミが多く、水も汚れていた湧水地を整え、ベンチや花を設けて人々が憩える場所に再生する計画を語った。

また、揺れる地盤の特性を逆に活かし、子どもが跳ねて遊べる場所にできないかという住民の発想も紹介した。これは渡辺氏が構想を練っている段階の案として語られている。

地域の山からは湖や朝霧を望める場所があるといい、渡辺氏は、その景観を生かした民宿やエコツーリズムの可能性にも言及した。

行政への陳情や不満の表明にとどまるのではなく、住民自身が地域の課題を見つけ、できる範囲から解決策を考え、子どもたちにつながる夢を描くことが大切だというのが、渡辺氏の考えである。

新刊と、知見を蓄積した「AI ジャンボ」

渡辺氏は、台湾で 11 月 19 日に新刊が発行されると話した。

また、本人の著書 20 数冊、論文、ブログなどをまとめ、約 1 億字に及ぶ情報を取り込んだ相談システム「AI ジャンボ」を紹介した。

利用者は QR コードから携帯電話でアクセスし、人生やまちづくりに関する相談を入力できる。料金は月額 2,000 円で、番組では多くの質問ができるサービスとして案内された。

渡辺氏によれば、AI ジャンボは本人の生身の講演とは異なり、冗談や過激な表現を交えず、落ち着いて論理的に答える。

特に、地域のリーダーが周囲に相談しづらい悩みや、まちづくり上の疑問を抱えたときに利用できる点を強調した。

番組内では、本人の話し方と AI の応答の違いを笑いを交えて紹介しつつ、蓄積された経験や知見を相談に活用する仕組みとして説明していた。

幼少期の経験に見る「問い続け、自分で動く」姿勢

岡本氏から、渡辺氏の意欲や発想力の源について尋ねられた渡辺氏は、小学 1 年生の頃の経験を語った。

パチンコに通う見知らぬおじさんに「なぜ行くのか」「権利とは何か」「お小遣いはないのか」と次々に質問したところ、おじさんからパチンコ玉を約 100 個渡され、換金してくるよう言われたという。

渡辺氏は、パチンコ店の床に落ちている玉を集めるため、同級生の産業廃棄物業者から工業用の大きな磁石を 3 個ほど借り、紐で結んで床を掃くようにして回収する方法を考えた。

店主は、渡辺氏が貧しく自転車を持っていないことを周囲に伝え、玉を拾うことを認めた。

集めた玉を換金して得たお金で、渡辺氏は自分用を含む自転車を 3 台買い、自転車を持っていない子どもたちにも渡したと振り返った。

この経験を通じて渡辺氏は、疑問を持ち、相手に問いかけ、自ら動くことが、周囲の理解や協力につながると語った。

地域活動でも、現場に入り、課題に向き合って動くことで人との縁が生まれ、助けてくれる人や新たな機会が現れるという。

河合さんからは、渡辺氏が人と深く関わり、協力者を得ていく様子を「人たらし」と表現する場面もあった。

能登半島への物資支援と現地との継続的な交流

渡辺氏は、12 月 25 日・26 日に能登半島の被災地へ赴き、「ゆめみしま」米を約 500 キロ、みかんを約 200 キロ運ぶ計画を紹介した。

米は約 89 組分で、1 袋を約 5 キロとして見積もり、みかんと合わせて輸送物資は約 700 キロになるという。支援は継続しており、活動が 3 年目から 4 年目に入る段階だと話した。現地からは、今年も米を届けてほしいという声があったという。

輸送に使う車については、現在のルーミーでは荷物を積みきれないとして、車両を検討する必要があると話題になった。

能登への移動は、夜に三島を出発して現地に向かう長距離移動となる。

渡辺氏は、出発が夜 9 時頃、到着が早朝 5 時半頃になることがあると説明した。

特に 1 月・2 月は日本海側の吹雪や強風が厳しく、2 メートル先も見えないほどの状況や、荷物を積んだ車が風にあおられる危険について、同行者と語り合った。

被災後の立ち上げを支援した寿司店など、現地の人々との交流も続いている。

渡辺氏は、現地に足を運び、困りごとを直接聞くことで、物資を届けるだけではない関係が生まれ、新たな課題や産業再生の可能性にも気づけると述べた。「池に石を投げないと波紋が起きない」という言葉で、現場に自ら関わる姿勢を表していた。